

---

# 不要の理

シズカナナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不要の理

### 【Nコード】

N2113V

### 【作者名】

シズカナナ

### 【あらすじ】

生きる意味を失った彼女は、唯一にして最期の願いを叶えるべく己を代償とした。甘い彼女の闇に惹かれた悪魔は、いつしかその絶望に痛みを覚える。「私などもう、要らないの」「なあ、人つてのはよ、絶望だけじゃねえだろ」「契約の元、人と悪魔は邂逅する。（悪魔・暗い・切ない？・ハッピーエンド）本編完結済みですが、もうちよっと続きをつけるつもりです。

1、失われる意味、あるいは不要の理（前書き）

全体的に暗いです。ジメジメ注意！！

## 1、失われる意味、あるいは不要の理

願いを叶えるために、何を差し出してもかまわなかった。ただ一つを叶えられたならば、こんな私にも、きつと

意味を見つけられる。

久しぶりに呼ばれて行けば、そこには魔術師と呼ぶには余りにも貧相な少女。

どこか不安げでそわそわしているその姿は正に人間という生き物だった。

「あんたが、俺のマスターだな」

俺の言葉にそいつは小さく頷いた。

ふと、血の匂いがして見れば魔法陣は血で書かれており、少女の手には包帯がまかれていた。

己を代償にしての召還。それならば、俺が呼べたのも頷ける。

本来、俺のような上級悪魔はよほどの魔力がなければ呼び出せない。

しかし、それは己の躰と魂を代償にすればできないこともない。魂だけでなく躰もその対象に入れたなら対象の悪魔の階位は格段に上がる。

なんせ俺たち悪魔は魂も欲しいが、地上を自由に移動できる躰もそれ以上に欲しいのだ。

地上を自由に行き来できるならば、いちいち召還に応じて出向く必要もなくなる。

生憎この少女の躰はまだ若く、使い勝手も良さそうだ。

「いいぜ、あんたの望みを言ってみな。大抵の願いなら叶えてやる」

俺の言葉を聞いて少女はこちらを見据えて、口を、開いた。

「私の父を、生き返らせて下さい」

愛された記憶とか優しい笑顔とか、そういう物は知らなかった。ただひたすら実験に没頭する背中とか、神経質そうにピーカーを掴む手とかならば、物心ついた時から知っていたけれど。

父は科学者として成功をおさめていたから生活に不自由はなかった。ただ母はいなくて、家で私はいつもひとりだった。

会話は皆無。父の実験室はガラス越しにしか見たことがない。

それでも私は父が好きだった、とても尊敬していた。

あの人の娘である自分がとても誇らしかった。

だから私は、父と同じ研究を学ぶことを決めた。

少しでも父のやっていることがわかったならば近づけるかもしれない。

そしていつか、私もあのガラスの向こう側へと行けるかも知れない、とそんな願いを抱いて。

だけど知ったのは、私と父の間には決して超えられない壁があること。

研究も技術も、結局私は凡人の域を脱せないままであちらになど行けないということ。

そんな現実のうちひしがれていて、私はある日どうしようもない間違いを犯す。

それは全てを呑み込む炎を生み出し、そして

父を殺した。

私の願いを聞いた悪魔は苦々しげな表情をした。

「それは、できないこともない、が」

「では、早くやって下さい」

父が生き返る瞬間に私はやっと自分の意味を見いだせるのだ。

何もできない私、父を殺した私。それらは、その瞬間に赦される。

私の全てと引き替えに、父を世界にかえしてあげよう。

はあ、とため息をついた悪魔は忌々しげに私を見た。

「だけどそれにはお前の差し出したものだけじゃ、足りねえんだよ。

その魂と軀だけでは人を生き返らせることは、できねえ」

「足りない…？」

私の全てなどでは、何も、できない？

瞬間、世界が暗闇に染まっていった。

ああ、そういえば血を流しすぎたのだった。

でも私などもう、要らないのだ

もう、なにも意味がないから。

## 2、否定されるべき何か、または愚かしい痛み

深く、そして何処までも底がない。

闇を孕むその感情は俺たちにとって何よりの甘美だった。

だから自分の存在が父親を救えないと知ったときの彼女の表情はそりゃあ、悪魔の俺が最高にゾクゾクするほどの絶望が詰まっていた。

甘くて濃厚で、とても気持ち良かった。

だけど、いつからだろう。

彼女がその表情を見せるたびに、俺は少しずつ苦しくなっていた。

生命の危機とかがってほどの苦しさがなくて、ただ胸がちくつとなるだけの、些細な、とるに足らない痛み。

でもそれは確実に、俺を浸食していく。

「ねえ、悪魔さん」

「ん？」

口を開けば、自分を殺せと言う彼女。

だけど俺はその願いを叶えることはできなかった。

たとえ、本人がそう望んだとしても、契約の元で下僕となった者が主を殺すことはできないのだ。

できるとすれば、そう、たったひとつ。

でも、それは

「先日、何かの書物を読んだのですが私と貴方の契約、破棄できませんね。」

何処か、光りを見つけたような笑み。

それを見て俺は不覚にも、ああ、いいなと思ってしまった。

「まあ、な。それなりに手続きをふめばだけどな。でも俺はそんな気ねえぞ。もったいねえ。」

あんたの契約は魂と躰の両方を与えるってもんで、そんな契約は滅多にないんだからな」

「でも、私はもう願いなどないのですよ。私はまだこれから何十年も生き続けるんです。」

その間、あなたは私が願いを見つめるか私が死ぬまで待たなくてはならない。それこそ、時間の無駄ではないですか？ それに、」

うつむいてしまった彼女の表情は上手く読みとれないが、何か言葉を選んでいようだ。

「魂と躰の両方を手に入れるなんて、契約を破棄した後にあなたが私を殺せば、済む問題じゃないですか？」

ああ、知ってしまったのかと俺はまた、あの苦しさを感じた。

悪魔が人間界に行けるのは、人から招かれた時だけ。

招かれたとしても、その代償として自動的に主と下僕の契約を結ばされている。

招かれることと引き替えに結ばれた契約は、俺たちが人間界に存在する全てだ。

だけど、契約破棄をしたなら俺たちはそのしがらみから解放される。

人間界で自分の自由にできるってわけだ。 といっても、留められるのはせいぜい一日程度だけ。

精神体としての俺たちには、この世界はあまりにも全てが整いつぎいてすぐに消されてしまう。

でも、契約主が契約破棄の時に、『ソレ』を認めてしまえば俺たちはその魂も躰も、全てを譲り受けることができる。

「私は認めますよ、『己の存在の消滅』を」

自分は不要だから、もう要らないから。

そう願われれば、俺たちは元契約主を殺して、それに成り代われる。

「私はその破棄の方法とやらを知らないの、貴方をお願いしなくてはならないのですが、よろしいですか？」

「全然、良くねえっ!!」

思わず声を荒げてしまった。

なんだか分からない感情が後から後から溢れる。

落ち着け俺と思っても、チクチクと胸の痛みは大きくなり続け、とまりそうもなかった。

「なあ、人つてのはよ、絶望だけじゃねえだろ」

必死すぎる声は自分でも情けないほど。

悪魔はいつでも冷静にと誰だったかに言われたが、今はそんなことを考えていられない。

「希望とか夢とか、そういうもんだって底なしにあつてよ、何処までも悪あがきをして、無様なほど懸命に生きてるもんだろ。だったら、なあ、 たのむから、あんたも、生きてくれよ」

俺を喰んだ浸食はどうやら、いくところまでいってしまったようだ。

ああ、なんで俺は悪魔のくせにこんな反吐がでるような言葉を口に出しているのだろう。

驚いて見開かれた彼女の瞳は、一体何を見ているのか。

確実に分かるのは、生きることを説いた愚かな悪魔を映しているということだけ。

「あなたは、愚かですね」

彼女が放った言葉は正にその通りすぎて、俺は何も返事もできないまま、ただ俯いた。

「悪魔なのに、そんなことを言うなんてあまりにも愚かすぎます。

それに、怒鳴られたことなんて私は一度もなかったから驚きました。二度としないで下さい。それから ……ありがとうございます

「

思いもよらない言葉に反応して顔を上げると彼女の瞳からはポロポロと涙が落ちていた。

「あなたが、初めて、言ってくれたんです。私に、生きると。生きても良いのだ、と。」

「こんな私に、こんな、私に、こんな私に、」

普段は魔力を使うから余り実体にならないのだけど、この時ばかりは、ならずにいられなかった。

だって、このままでは、彼女を抱きしめられない。

実体になって初めて触れた彼女はとても小さくて

この身体の何処に、あの重く深い絶望があるのだろうと思った。だけどこの細い肩は、ずっとあの重みに耐えていたんだ。

「ありがとう、ごさいます。ありがとう  
「もう、泣き止め。じゃなきゃ、はなさない」

泣きじゃくる彼女を抱きしめながら  
底なしの絶望からこの人を守りたいと、願った。

俺は、悪魔なのになあ。

それは酷く愚かで  
だけど、どうしようもなく温かい

あつてはならない何かの、始まり。

### 3、綺麗に笑う悪魔と、美しい刀

必要とされる道理など、どこにもない。

だけど、私は愚かだから

この手が私を必要としてくれると思ってしまった。  
願ってしまった。

そんなの、きつと、赦されない願いだったのに。

「あの人を、返してよ」

研究所からの帰り、後ろから声をかけられた。

女にしては低すぎて、だけど男にしては妙に艶っぽい。

ふり返れば、黒髪を肩まで切りそろえた美しい人が立っていた。

顔はとても綺麗で、綺麗すぎて、まるでこの世の人とは思えないほど。

「あの人？」

私の交友関係は極端に狭い。

だから、相手の言う「あの人」などすぐに思いつくことはできなかった。

人違いではないだろうか。

「人…ではないからかなあ。まあいいや」

ニヤリと妖艶な笑みを浮かべてその人は私に近づく。

「ねえ、望みなんてないんだよね。だったらもういいでしょ。早く死んで、全てを渡してよ。あなたなんて、生きているだけで迷惑でしかないんだから」

つらつらとつむがれた言葉は今までの私が考えていたことだ。

この世界に要らない、無意味な私のこと。

だけど、何故だか私は酷くショックを受けてしまった。

「それは、そうかもしれませんが…でも、」

「でも、なあに？」

言い返されるなどと思ってもいなかったのだろう相手は、心底不思議そうな顔をしている。

その瞳に言い知れぬ威圧感を感じて、出かかった言葉を飲み込んでしまいそうになる。

確かに、私は不要だ。この世界にはいらぬ存在だ。

希望も夢もない私は、非生産的な生き物ではない。

でも、それでも、私は

「生きてみたい」

生きても良いのだと言ってくれたあの人と一緒に、この世界を見てみたい。

私の返答に、心底呆れたような様子の相手は溜息を一つ。

「そう、それがあなたの答えなんだね」  
気が付けば日は落ちて、空は赤く染まっている。  
真っ赤に染まる麗人はどこまでも美しく、背筋が凍るようだった。

「でも、それを快諾できるほどできた悪魔じゃないんだよね、僕」  
伸びる手は私の首に触れる。確かめるように首回りを撫でる指は驚くほど冷たい。

「こんな、たかが人の子どもに、あの人が心を砕いているかと思うと虫唾が走るね。本来ならば、一瞬で終わるはずだったのに、どうして、どうして、どうして…」

徐々に力が込められて、首がしまっていくのを感じる。  
息苦しさとともに、視界が暗く染まっていく。  
立っていられないのに倒れないのは、首を絞める腕がすべてを支えているからだろう。

ああ、死んでしまおう。  
生きると、言ったのに死んでしまおう。

悪魔のあの人は、泣いてくれるだろうか。  
私のために、泣いてくれるだろうか。

泣いてくれるなら、なら…

「きえろ」

硬い何かに抱きしめられた。

一気に酸素が送り込まれてせき込んでしまおう。

まだ視界はチカチカと光っていてよく見えないけど、この声はきつとあの人だ。

「わあ、飛んできたんだね。なに、そんなにこの契約者が心配？ 死にそうになるとすぐにわかるように細工して、そんなに死なせたくないの？ ねえ、そういう遊びなの。」

「うるせえ、おめえに関係ねえだろう。一体、どういうことだ契約者に手をだすなんて意味わかってるんだらうな。」

ぎゅっと抱きしめられると、とても嬉しくて涙が出てきた。

この体も本来はありえないはずの虚無のもの。それなのにとても暖かくて優しい。

私を、とても心配して、とても大切にしてくれる手。

ああ、私は、きっと、この人が

「だって、退屈なんだもん。ねえ、前みたいにまたいっぱい遊ぼうよ。必要ならば僕がまた探してあげる。だから、こんな面倒なのやめなよ。僕が殺してあげる。」

「ふざけんな！」

ケラケラと笑う声にゾクリ、と寒気がした。

本気で私を殺そうとしている声。私が死ぬことをなんとも思っていない。

視界がはつきりしてきて見えたのは、綺麗な人とその手に握られた剣。

美しいその人に良く似合う、剣先にまで細かい細工がされた剣だった。

「ねえ、綺麗でしょう？ 退魔剣なんだってえ。いつもだったら違うけど、今ならこれで刺されたら動けなくなっちゃうよねえ」  
くるくると手の中で剣を回して、その人は楽しそうに笑う。

「大した魔力もない契約者に縛られて可哀そう。すぐに、戻してあげるから、ね」

振り上げられた剣。私を抱いて、この人は逃げられない。ならば、ならば、

自分でも、驚くほどの力が出た。きつと、最初で最後の精一杯の力。

突き飛ばしたとき、とても驚いた顔をしていたあの人。悪魔を驚かせるなんて、私すごいのかも。

そういえば、名前を知らなかった。ずっと、悪魔さんって読んでいたから

だから、次にお話するときは、名前を、呼びたい。

背中に鈍い衝撃。

世界がくるりと反転する。

痛みはなく、ただ背中が熱いだけ。

響く声は、あの人、だ。

だから、私は嬉しくって、やっぱり泣いてしまうのだ。

そうして、次に目覚めた私は  
契約した悪魔と大切だと思った人を  
全て失っていた。

#### 4、失われる繋がり、そして甘い絶望

失われるべきものだったのだと悟り  
どこかで安心して

そして、酷く絶望した。

「つまぁーんないー」

ぶりぶりと不満げな顔をしてソイツは俺の周りをウロウロする。  
怒りにまかせて殴れば、綺麗な面の半分は吹き飛んだ。

「ひっどおーい。この世で考えられるであろう美しさなのにいー」

「どうせ、すぐに再生すんだろ」

不満を隠そうともしないソイツを置いて、俺は他の悪魔の契約状  
況を確認に行く。

契約破棄は、何も人間に限ってできることではない。

悪魔でも契約破棄はできる。しかし、それはあまりにもこちらの  
負担が大きい。

魔力の消費や階級の剥奪、果ては自己の消滅など契約によってこ  
ちらが失うものは様々だ。

俺の場合は魔力をすべて奪われる程度で済んだ。まだ本契約でな  
かったことが幸いしたのだろう。

「女、黒髪、極東は、今んとこいねえな…」

悪魔たちの契約者を確認して安心する自分に、我ながら情けなさを感じた。

彼女は、今どうしているのだろうか、と考えようとしてやめた。俺にはそんなこと考える必要はない。

契約の切れた契約者など、もう関係ないのだ。

魔力のない今の俺には、召喚に応じる力もない。

だから、もしも彼女の呼びかけがあったとしても答えられない。

願わくは、これからの彼女が人らしく懸命に生きることだ。

悪魔の俺に願われても迷惑かもしれないが、ただそれだけが俺の願い。

共に在れない、俺の唯一の願い。

チクリ、とまた胸が痛んだ。

「じゃ、俺、しばらく眠るな」

「つまんなあーい。折角、戻ってきたのにー」

「うるせえ、魔力戻さなきゃなんもできねえだろうが。ちいっと100年ばかり眠ってくる」

そうして、目を閉じて、深い眠りにおちた。

ねえ、ねえ、名前を教えてくださいな。

え？突然なんだって、そうですね。驚かれますよね。

でも、私、名前が知りたいんです。  
悪魔さんの、名前を知りたいんです。

だって、じゃなきゃ呼べないでしょ。

あなたのことを呼べない。

あなたが私を不要としても、私はあなたが必要なんです。  
もしも、死ぬのならばあなたの傍が良い。

それまでは、愚かしいほど懸命に生き抜いてみせます、から。

だから、教えてください。

どさり、とどこかに落とされた。

地面を見れば魔法陣。むせ返るほどの血の匂いは、己を代償にしての召喚だということがわかる。

恐る恐る、視線を上げれば、そこには彼女が幸せそうに笑って立っていた。

「よかった、私の魔力も馬鹿にしたものではないんですね」

ニコリと笑う彼女の顔は土色で、生気がまったく感じられない。

「どう、して」

まだ魔力が十分でない俺。100年どころかまだ10年しか経っていないようだ。

これは、一体。

「何処までも悪あがきをして、無様なほど懸命に生きた結果ですよ

「 フラフラと俺の傍に近づいてくる彼女は、あの頃のような絶望を抱えた表情はしていない。」

しかし、目は虚ろでどこか死人のような雰囲気すら感じる。

「さあ、契約を。私の魂と躰を交換に、一つ望みを叶えてください」

「なんで…どうして、こんなことしてんだよ」  
意味が分からなくて混乱したままの俺に、彼女は優しく答える。

「あなたに会いたかったから」  
ポロポロと零れる涙は止まらない。

でも、今の俺には彼女を抱きしめるために具現化する力がないのが歯がゆい。

必死で彼女に手を伸ばせば、精神体でしかない俺の手を、彼女は確かに握った。

「あなたに会いたくて、私は頑張りました。だから、望みを聞いてください」

継るように言われて、俺は何も言えなくなる。

召喚による契約の元、下僕は主の望みを聞かなければならない。それが、本契約になるのだから。

「望みは、…なんだ」

「私が死ぬその時まで、一緒に居て」

思わず抱きしめれば、やはり細くて小さい肩。どこまでこの人は頑張ったのだろう。

限界の近い体を思って、チクリチクリと胸は痛む。

「大丈夫です。きっと、もうすぐ終わる、から、」

「ああ、わかった。俺は最後まであんたの傍に、居よう」  
心底嬉しそうに笑う彼女。ああ、本人もちゃんと死期を悟っている。

人の世を捨てた体。だから、俺に触れられるのか。

「私、頑張ったんです。たくさんの悪魔を呼びだして、聞きました」

「…聞き捨てならないんだか…今更か」

ふふふと悪戯げに笑う彼女。いったい何を聞きたかったのか。

「あなたの名前を、知りたかった」

ああ、と納得する。上位悪魔である俺の真名は俺よりも階位が高くなければ分からない。

「だれも知らなくて、生贄をあまり持っていけなかったから助かりましたけど」

「…体の一部を、渡したのか」

「だって、何も無い私にはそれしかなかったから」

でもね、とどこか誇らしげに彼女は言葉を続ける。

「魂だけは、あげませんでした。体も動くことのできる最低限は維持してあります。だから、あなたが使うときは何の問題、も」

「そういうことじゃねえだろ！！」

魔力も十分でない人間は、そうやって生贄を支払わなければならぬのはわかる。

でも、俺は何故だか許せない気持ちになってしまう。

「全部、俺のだろう…一つだって、ほかのやつにくれてやるな」

「そうでしたね…ごめんなさい」

ふらりと、握っていた手が離れた。床にしゃがみ込む彼女をとっさに支える。

ああ、もう、限界が近いということか。

こんな一瞬のような時間のために、彼女は10年も費やしたというのか。

「私は、やっぱりただの凡人で、魔術の才能も魔力も人並みでした。でも、あなたに会いたい気持ちで、ここまでこれたのです。この10年、私は確かに生きていました。だから、」

もう、いいでしょう。

待ってくれ、と抱きしめるとそのまま彼女は俺の中に消えていく。契約は成就され、魂と軀は俺に譲渡された。

魔力は戻り、俺は本来の姿を取り戻す。

取り残された部屋は、愛しい人の血の匂いであふれていてそれがたまらなく甘美で、酷く苦しかった。

## 5、存在の肯定として、君を欲す

とても気持ちの良い眠りだった。

夢も見er間もないほど、どっぴりと暗闇の中で眠っていた。  
時々、優しく触れる手の感触はわかっていただけ、ただそれだけ。

永遠に、このまま。

私は独りで眠り続ける。

それが、無意味で不要な私にできることだと、  
そう思っていた、のに。

「おきろ」

絶対服従の声が私に呼びかける。

瞼は私の意思を無視して、ぱちりと開く。  
開ける視界。明るい世界。見知らぬ色。

「お呼びでしょうか、マスター」

「…そのしゃべり方やめろ」  
そう言われても、私には何も分からない。  
全てはマスターの思うままに。

「人間だったころの人格としゃべり方、思い出せ」  
「…少々、お待ちください」

マスターに言われて初めて自分が前は「人間」だったと思い出す。そう、私は人だった。

動く腕に、視界は良好。

軀の全てが揃っており、何一つ欠けてないことがわかる。代償として失ったものがすべてそろった軀。

そして、隣にはあの人が、いる。

どうして、目から何かが落ちるのだろうか。

どうして、マスターを見て胸が苦しくなるのだろうか。

どうして、たまらなく幸せな気持ちになるのだろうか。

わからない、わからない、わからない。

でも、

「私は、何になったのでしょうか」

「俺のものだ。俺のために生きて、俺のために尽くす。そういう生き物になった」

私の言葉に、その人は心底嬉しそうに笑いながら答えた。

その笑みを見て、私も笑おうとした。

「だけど、起きたばかりの私は「笑う」という表情を作ることができない。」

難しい顔になってしまった私を見て、その人は笑みを曇らせた。

「嫌だったら…設定を変えてやれないことも、ないぞ」

「いいえ、このままが良いです」

手を伸ばせば、恐る恐るといった感じで握られた。  
それは、長いようで短かった10年で人だった私がひたすらに求めたもの。

「躰は、どうしたんですか」

呼び出した悪魔たちへの代償とした躰の一部はすべて揃っている。

「取り戻した」

誇らしげに答える言葉に、私は思わず首をかしげた。

「それにしても、あんたものすごい数の悪魔を呼びだしてたんだな。見つけて奪うのに時間かかったぞ。1000年もかかっちゃうなんてな」

思わぬ時間の流れに驚きそうになるが、一度死んだはずの私がこうして目覚めたことを思えば長い時間ではないのだろう。

「すみません、ご迷惑をおかけしてしまいました」

「いや、いいんだ。こうして、また会えた」

ぎゅっと握られる手は、隠しきれぬ感情が感じられる。

その感情は、きつと、私の中にもあるものだ。

「これからは、俺のために在ればいいんだ」

たまらなく幸せな言葉に頷きそうになってとどまった。

「ただ、私は本当にそれを受け入れてしまっても良いのだろうか。」

「でも、また迷惑をかけてしまうかも…」

「あんたを起こしたのは、俺だから気にするな」

「お役に立てないかもしれませんが」

「あんたは、生きていていい」

「いつまで…」

いつまで、私は傍にいたことができますか？

「俺が死ぬその時まで、だ」

ニヤリと笑ったその人が、たまらなく愛おしくて、私は思わず抱きついてしまった。

「返事は、どうした」

「…はい」

それは、10年と1000年をかけて、ようやく交わされた本当の契約。

願いを叶えるために、何を差し出してもかまわなかった。

ただ一つを叶えることができるのならば

あつてはならない何かも、赦されざる願いも

世界には必要とだと肯定される。

道理も理も無意味にして不要にして

ようやく、二人は微笑み合うのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2113v/>

---

不要の理

2011年8月6日15時01分発行